

## 『いころ から いころ へ』

— ひびき合える世界を求めて —

渡 邊 顯 信

### I はじめに — 問題の所在 —

こんにちは。さきほど皆さんが学園歌をお歌いになられたようですが、私の耳が悪いのか、皆さんの声がほとんど聴こえませんでした。拝見していますと何人かの方が口を動かしておられましたから、歌っておられたのでしょう。学園歌でも歌いにくいのでしょうか、それとも、それぞれの思いがあたりだったのでしょうか。

両手を合わせますと、それぞれの働きをもった五本の指が合います。まさしく合掌。

この合掌の世界は歌う方の合唱の世界でもあります。自分が歌うことによって隣の人と声を合わせられ、大切な学園歌を歌い合わせることが出来ます。そういう意味ではこれから学園歌を歌う機会がありましたら、遠慮せず大きな声で歌っていただきたいと思います。

今の状況を想像して本日の講題を決めたわけではありません。「ここからここへ」というのは、本当に自分が努めなければ伝わりません。自分がその気持ちにならなければ隣の人の心のひびきがわかりません。そういう意味では、昔流のおとしやかな女性もいいんですが、もっと積極的に自分の声を出されることをお勧めします。

# 1 生命いのちの実感 ―最近の世相から―（現代の諸問題と佛教の役割）

最近の世相と申せば皆さんお気づきですね。国内では六月一日、長崎県佐世保市の小学校で仲のいい友達同士が、何かの感情の違いで一方が一方の生命を奪ってしまつた。国外ではアメリカを中心としたイラクでの戦争が未だに続いています。

皆さんにお尋ねしますが、一九四五年八月一五日をご存じない方、手を挙げてくだ

「ころ から ころ へ」

さい。いらつしやいせんね。うれしいことです。この重要な日を知っていることは大切なことです。第二次世界大戦、太平洋戦争が終わった日でした。別の見方をしますと、日本が初めて敗戦という、国としては初めての経験をした日です。敗戦の背景には数千万人もの人々の尊い生命の犠牲がありました。その犠牲を礎に、二〇〇四年、平成一六年の今日、この場に皆さんの生命が存在しています。一九四五年の終戦がなければ、この中の何人かは此処に存在しないかもしれない。そういうことを思いますと、生命の大切さを感じるのは他人ではなく、あなた方一人ひとりです。そのことを実感した時、両手を合わせ、感謝の合掌をすることも自然にできてくると思います。

与えられた人生ではありますが、あなた方にとり自分の人生は今しかありません。ですから自分の生命を大切にしていたきたいのです。本当に自分の生命を大切にすることは、必ず他人の生命も大切にすることになるはず。しかし残念ながらいろいろな国があり、いろいろな考え方の人が集まりますと、自衛本能のためか自然に力関係が生じ、「自分の方が正しい」と言わざるを得ない状態になり易いですね。それ

も正しいでしょう。ですが「自分が正しい」という主張は、気をつけなければ「お前は間違っている」となる可能性が高くなります。その最悪な結論が、「お前の生命はもういらない」となってしまう事例を私たちはよく経験しますね。

判断の岐路に立たされたとき、正しい判断能力に導いてくださるのが、光華女子学園の背景にある佛教、ゴータマ・ブッダの説かれた教えであります。相手の生命をおろそかにするのではなく、大切にして自分も支えられて生きていく。これが佛教の基本姿勢です。皆さんは授業の中で佛教や、真宗の基礎を学ばれたことでしょう。あるいは高校や中学でミッシヨン系の学校出身者の方も居られるでしょうが、キリスト教でも基本的には同じことを学ばれたことでしょう。

相手の生命を大切にする方法として、科学技術が利用されるのであって、決して相手を排除したり抹消する手段として、一方的に科学技術が応用されてよいはずはありません。しかし、いろんな宗教がある中で、残念ながら時折り、「自分の宗教の方が正しい」という行動に走る誤解者や妄信者もいます。

生命の実感は、一〇代、二〇代の人でも感じているはずですよ。それが実感という確

『ころからころへ』

証になっていないから、ああいう事故が起きたのでしょう。しかし事故で生命を失うほど残念なことはありません。力関係や己の低レヴェルで重要な事象を狭視的に見てしまうことは、慎まなければなりません。

ここに「しかられた君に」というある方の詩があります。

磨き粉があるからものが光る

磨いてくれる人がいるから人間が光る

嫌な人はみんな、磨き粉

だから磨き粉にありがとう。

また、ダウン症児を持たれたあるお母さんの話ですが、その母親は、車椅子を押して一二年間、小学校から高校まで一緒に授業を受けて来られた方です。その方の感想ですが、周囲の方が「大変だったでしょう」と申し上げると、お母さんは「あたりまえと思えば何ともありません。生きることの喜びをこの子に教えられました」と言わ

れ、その笑顔が光っていたそうです。その印象が次のように表現されています。

「観音様のお顔ってみたことないけど、もしかしたらこのお母さんのような

顔かもしれない」。

皆さんの中にも似たような経験をされている方もおありでしょう。親の気持ちは子どもに障害があればあるほど、一層その子の生命を慈しむようになられるようですね。ここにおられる多くの皆さんは自分の手足で行動でき、自分の言葉で自分の気持ち表現できる方です。本当に恵まれています。光華に入学したくても家庭の事情や身体の事情で入れなかった方があるはずです。その事実に思いを馳せますと、あなた方一人ひとりが学園生活を有意義に過ごし得るかどうかが、結果的には、その方々の痛みや悲しみ、苦労を少しでも活かし得るか否かに直結することになるはずです。

そのような事実が気がづきますと、学園生活が輝いてまいります。その結果として先ほどのお母さんの言葉のように「生きることの喜びを教えられた」という気持ちになることが出来るのでしょうか。

【こころ から こころ へ】

現代の世の中は政治、経済が中心になって動いてきました。その大きな理由はそうすることが人間は幸福になれるという大前提のもとで政治思想、経済思想が考えられ、一九世紀、二〇世紀を通して科学技術が発達してまいりました。ところがどうでしょう。一九世紀から二〇世紀、二〇世紀にいたっては二回の世界大戦がありました。ダイナマイトという工業技術の開発は、土木事業を容易にするためのものでした。ところが第一次世界大戦ではそれが武器として使われてしまいました。

一九世紀、二〇世紀前半では、アインシュタイン等に代表される物理学も原子力問題も、本来は人間の生活エネルギーをサポートするためであったはずですが、原子爆弾の開発に直結してしまい、昭和二〇年八月六日と八月九日に広島、長崎に投下されてしまいました。人類史上、原子爆弾が投下されたのはその二回だけだとは言え、そのために数十万人の一般庶民の生命が奪われました。多くの人々が瞬時にその生命を失ったり、長いあいだ重い障害に苦しんで来られ、子どもや孫の世代まで被爆の影響により体調不調で苦しんでいる方も居られます。私の母も広島出身ですので数人の親類が亡くなりました。

原子力は、大量殺戮・破壊武器のために開発されたものではなかったはずです。ブッシュ大統領は悪の枢軸国としてアフガニスタン、北朝鮮、イラクをあげました。その悪という判断基準は、大量破壊兵器、殺人兵器保有疑惑もその一つで、その開発を抑えるためだと言って戦争を実行し、今でも正当化する発言を続けています。でもどうでしょう。アメリカ自身が大量破壊兵器を廃絶する方向に向かっているのでしょうか。私は彼と話し合う機会がないのでわかりませんが、もしそういう機会があれば尋ねてみたいと思っています。

「大量破壊兵器を抑止したいのならば、アメリカが率先して廃絶し、相手国にも同調せしめるべきではないのか」と。

きっとブッシュ大統領はそういうことは重々わかっているはずですが、アメリカだけの国益や、自分のグループだけの利害関係を保護する低レベルの発想だけに留まっているように思います。そのような政策の場では、テロ行為はもちろん、諍いや殺人行為に終結はありません。

相手に核兵器廃絶を求めるためには、自ら核兵器開発を停止し廃絶しなければなら



「ころからころへ」

ない。それが広島、長崎で亡くなられた方々が、自分の生命をかけて教えてくださった教訓でありましょう。この悲惨な事実以上の貴重な事例はあり得ません。多くの犠牲者の方々は、現在のような世界の状態になるとは想像もされないでしょう。現代に生きている被爆体験国の私たちは、常に大量破壊兵器の廃絶を訴え続けていかなければ、数千万人もの人々の大切な尊い犠牲を無駄にしまうことになるでしょう。

2 宗教とは何だったのか？ — その本質的語義と慣例的語義 —

そういうことを含めまして現代の世相がいかに乱れているかを思いますと、いよいよ私どもにとって大事になるのは、宗教とは何だったのかということでもあります。

レジュメに書きましたとおり、日本語の宗教という言葉と、Religionと言う言葉は、ともすれば同一のように理解されていますが、実際には語義は違うんですね。

「Religion」はラテン語の religio から来ています。これは接頭辞「re-（再び）」と、動詞「lig（結ぶ、縛る）」の religare からの「religio」と、或いは動詞「leg（拾う、読む、集める、観察する）」の relegere からの「religio」という名詞です。

「再び結ぶ」とか、「拾い集める」ということは、神から禁断の罪を犯して追放されたアダムとイブを、何とか救いたいという神の恩寵によって、再び拾い上げる、再び神と人間の関係を結ぶということで、「Revelation 啓示の宗教」と言われる由縁です。それに対して佛教は「Buddha 目覚めの宗教」と言われます。動詞「budh（目覚める、悟る）」を語源とする「buddha（自覚者、目覚めた人）」の教えが佛教で、非人間的絶対者の教えではありません。目覚めさえすれば、誰もが「Buddha」になれる教えです。目覚めなければ、仮にいかにも有能な人であったとしても Buddha とは言えません。何に目覚めるか。真実に目覚める、本当の事実を認めて行ける感性、それが目覚めるということで、「Buddha 目覚めの宗教」と言われる由縁です。

### 3 佛教とは何だったのか？ — その本質へのアプローチ —

#### （基本的佛教用語の確認）

次に、佛教とは何だったのかということの確認をしたいと思います。  
皆さん、自分自身って何だろうと考えたことはありませんか。私は何者なんだろう。

「ころからころへ」

私の何年後はどうなるんだろうなどと、自分に対する疑問を持たれたことがおありでしょう。実は二五〇〇年ほど前のゴータマ・シッダールタも同じ疑問を持ちました。そして二九歳の時に出家され、六年間の苦行生活を続けた後、三五歳の時に真実に目覚められ、ゴータマ・ブッダになりました。ご存知のように、ゴータマが姓で、シッダールタが名前でしたね。真実を自覚されたのでゴータマ・ブッダと申しあげます。二五〇〇年前にゴータマ・ブッダが自覚された内容が「佛教」として伝えられてきております。

今から八〇〇年ほど前、鎌倉時代という混乱期に何人かの求道者たちが、真実を求めて苦勞され、それぞれの宗派を開かれています。そのひとり親鸞も「佛陀」の教説に導かれ、苦勞された歩みが浄土真宗として今日に伝えられています。

親鸞も、八百年後の私たちも、歴史上のゴータマ・ブッダにはお会いできません。しかし求道の姿勢に立ちますと、二五〇〇年、八〇〇年の時空を超えて、ゴータマ・シッダールタの抱かれた疑問が、親鸞の苦勞された求道の事実が、今、現在の私どもの疑問・悩みを解きほぐしてくれる教説として生きてくるのです。それに気づかされ

た時、新たな生きる活力に包まれ、支えられている喜びとなり、生命に対する積極的な自分の責任、義務が感じられるようです。そういうことに気がつけば、自分の現在の状況がどうであれ、その中を生き抜いていけるエネルギーを与えられます。そのエネルギーのもとが、サンスクリットの音写語「南無阿彌陀佛 (Nanomitāyus[abha]-buddhāya)」という言葉として伝えられて来ています。

「南無阿彌陀佛」の直訳的意識Ⅱ「人間の知識や智慧では計量することの不可能な壽命や光明を特性とされる自覚者の佛様に導かれて生活して参ります」と言う意味)

### 三〔四〕法印

レジュメの次の項目「三法印、四法印」を和語で表現したのが皆さんご存知の「いろは歌」です。

色は匂へど散りぬるを（諸行無常）

全て作られたものは 無常であり、

『ころころ ころころ へ』

我が世誰ぞ常ならむ（諸法無我）

すべてのものに我がもの（実体）は無く

有為の奥山今日越えて（生滅滅已）

生じ滅することに捕らわれず

浅き夢みじ酔ひもせず（涅槃寂静）

煩惱の滅した涅槃こそ静かな境地

「法印」とは旗印の意味で、佛教を証明する基準のことで、三法印とか四法印といわれて来ました。「いろは歌」は平安中期に作られ、ある時期までは五十音表を「いろは順」で表現していました。悉曇（梵語 シッターン）の音表形式の影響を受けて、現在の五〇音表が一般的になりました。

「色は匂へど散りぬるを」、現在の皆さんは若くてピチピチなさっている。しかし確かに病氣にもなり、歳をとって行き、身体の機能も衰えて行くもの。「我が世誰ぞ常ならむ」、自分の人生というのは間違いないとも明るいんだということを誰が言えるだろうか。「有為の奥山今日越えて、浅き夢みじ酔ひもせず」、物事はすべて生じては滅するが、それに左右されず、打算的感情の無い煩惱の滅した涅槃の世界こそ静かな最上の境地。

一年前のあなた方と今のあなた方とは違うんですね。一年前のあなた方はもう滅しています。しかしそれを縁として今のあなた方が生きています。今日は失われるけれども、それをエネルギーのもととして明日のあなた方もまた新たに誕生するのです。数年後には親という、厳肅な生命の誕生も実感されるでしょう。しかし、すべてのものは常にこれしかないんだとか、常に定まっているようなことは一切ない。喜怒哀楽すべての感情は、かならず次の新たな生き方に繋がってゆくものです。嬉しいとか悲しいとかに左右され、浮かれたり、沈み込んでしまうこともあります。そこに止まるとあなた方の人生はそこで終わってしまいます。そうではなくて悲しいことも一つの踏み台にして、ステップにして次の世界が開けていく。その大切な姿勢を知らせてくれたのがゴータマ・ブッダの教えであり、実践されたのが親鸞でした。

### 日常用語の確認

次に日常用語の確認ですが、「縁起、無常、無明、真実」を書いておきました。

「縁起」 世の中の全ての事象は、いろいろな要素が縁によって集まり生じている

「ころ から ころ へ」

もので、絶対者的な神の創造によるものではない。

私たちと同じ人間のゴータマ・シッダールタが、真理に目覚められた時の重要な内容の一つ。

「無常」すべてのものが「縁起」ですから、永久に不滅ということはありません。

「無明」真実に対して明るくないこと、真実を知らない、無知とも言えます。

「真実」原語「satya」の語源「vas」は、英語の「be」動詞と同じで、その現在分詞と義務分詞形「存在すべきもの、あるべきもの」を意味する言葉です。

この外に、日常用語に使用されている佛教用語は数多くありますが、本来の語義を曲解させずに使用すべき努力の必要性を痛感させられております。

## Ⅱ 眞実との出遇い — 「佛教音楽」を通して —

### 1 人生と音楽 — 人間にとって音楽とは？ —

人間にとって音楽はどういう働きを持っているでしょうか。皆さんも考えたことがあるでしょう。佛教音楽の場合、楽器が鳴っている。美声を持った方が歌っている。それだけが音楽ということではありません。音には、いろんな音があります。工事現場の音や、耳をつんざくような騒音にしても、微かなピアノニッシモのような音にしても、囁きであつたにしても、すべて音です。そしてその音の共通点は、「ひびく」とであり、「ひびいている世界」が「本当の音の世界」でありましょう。

具体的には、身体五官機能中、言語や聴覚障害の方にも必ず「音の世界」があるのです。発語が不自由でも、また聴取が困難であつても、自分が発信したいという「心のひびきの世界」があるのです。

このように如何なる人でも共有している「眞実のひびきの世界」が、音楽の「音」



「ころ から ころ へ」

と言えましょう。そして、「楽」の字は「樂しむ」ことでもあります。親鸞が理解するように、「願う」という意味もあります。

結論として私は、次のように理解しております。「真実のひびき、本当のひびき、心のひびき」を「楽しみ、願い求めて行く世界」が、「音楽の世界」であると。

ですから「人生にとって音楽は何か」と問われれば、「最も大切なもの」としか言えません。換言すれば「人生にとって不可欠なもの」とも言えましょう。身近な両親や兄弟姉妹のひびきが解らなければ、自分の意思も通じません。発音が明瞭な言葉だけの世界でもありません。例えば、弟妹が悲しみや怒りの極みに意味不明の言葉を発しながら、泣いてむしゃぶりついてくるその中に、その本意を感じた経験をお持ちの方もあるでしょう。

## 2 佛教音楽

音楽は、決して自分の生活環境以外の別世界にあるものではなく、自分自身を支え、勇気づけてくれているひびきの世界であります。佛教音楽の場合は、ブツダの教え

をさらに聞き合い、広め合っていきたいという積極的な願いが、重要な原点でもありましょう。ですからどんなに悪声であっても、その人が一生懸命に表現しさえすれば、必ずひびく世界があるんですね。決して声の良し悪しや音量の大小ではありません。技術の良し悪しでもありません。その方がどれだけ一生懸命であるかということと、それをこちらがどれだけ一生懸命に受け止め得るかということです。そこには必ず音楽があります。そういうことを釈尊もおっしゃっています。

# （1） 釋尊と音楽

釋尊の略歴については、光華女子学園の『聖典』の歴史篇をご覧ください。その使われた言語についてはまだはっきりしていませんが、現時点では古代東部インドのマガダ地方系統の言語ではなかったかと言われています。原始經典は、聖典を表現するための言語であるパーリ語で伝えられておりますが、それに近い言葉を使われていたに違いないと推測されています。その実例が、レジュメに書き出したパーリ語の「三帰依文」です。ところで皆さんも無意識のうちにパーリ語を使っておられるのです。

【こころ から こころ へ】

「般若のお面」という「般若」の意味は、「知恵」という意味です。サンスクリットで「prajñā プラジュニヤー」と言いますが、パーリ語では「paññā パンニヤー」と言い、その音写語が「般若」なのです。プラは「前に、大いに」という意味の接頭辞で、ジュニヤーは「知る」という意味の動詞です。案外パーリ語とは知らずに使っている。このように日本語にはいろんな言葉が佛教用語から転用されているのです。授業で聞きになったこともおそらくですが、日本の精神文化の根底には佛教精神からの影響が少なくないのです。にもかかわらず現実の社会状況はどうでしょうか。

悲惨なそして過酷な戦争体験の結果、日本は如何なる戦争をも放棄宣言しました。それなのに、なぜアメリカのイラク攻撃に加担するような行動をとるのか。人道支援という形で三人の方々が人質になりましたね。最終的には解放されましたが、不幸にして殺害された国の方もおられます。やむにやまれぬ気持ちから三人の方が、それぞれに人道支援のためボランティアとしておいでになられましたね。三人の方々の姿勢・行動のなかに、私は慈悲に似た「精神のひびき」を感じましたが、三人に対する誹謗や中傷の言動があったことを知り、暗澹たる気持ちに襲われたことでした。

## （2） 經典記述事例

長部經典中の記述事例を紹介しましょう。詳細はレジュメをご覧ください。

あるときパンチャシカという青年が、弾き語りをしていました。普通ですと歌声が強いが、弾く方が強いのですが、パンチャシカの弾き語りを聴かれた釋尊は「両方とも調和していた。ハーモニーしていた。アンサンブルしていた」と言われたのです。「自然に、違和感なく」という意味でしょうね。佛教では歌舞音曲すべてを否定している」と誤解する方もおられますが、このような經典をご存じなかったのでしょう。

釋尊は「涅槃・寂靜（*nibbāna, nirvāṇa*）」の障害になるような享樂的歌舞音曲を容認されなかっただけで、この事例のように「こころに響き、悟りの表現である音楽」は、むしろ賞賛しておられました。

レジュメでは省略しましたが、パーリ語經典の後半では、更に次のように敷衍しています。

「如来を称讚し（*Buddhupasaṃhita*）、美しくしとやかな演奏で人心を感動させる響きがあり、衆義つぎに有り（*Dhammupasaṃhita*）、聖者の事を説き（*Arahan-*

「ころ から ころ へ」

tupasamhita) 又清浄な行動 (brahma-cariyā) を説き、沙門 (samana 出家修行者) や欲縛についても説き (kāmapasamhita) 涅槃 (Nibbāna 寂靜) 〔の境地〕を表現していた」と。

(3) 「結集」  
けっしゅう

次の「結集（けっしゅう…釋尊没後の經典編纂會議）」について、少し説明しよう。

「結集 (Sangīti : sam-√gai [共に歌う合・]) : singing together, concert, symphony. 釋尊の入滅直後 (B.C. 486 頃)、その教説の混乱や散逸を懸念した弟子達の間で、教説確認の会合が開かれました。「第一結集」と言いますが、社会運動など言う「結集（けっしゅう）」ではなく、佛典編纂會議のことです。この編纂會議をなぜ「サンギーティ Sangīti」と名づけたのでしょうか。そこに大きな意味を感じます。実力者がこう聞いたのだと強要するのではなく、「私はこのように聞いたのですが、

どうでしょうか。間違いないでしょうか」と確認し合つて編纂されたことでしょう。ですから經典は、「如是我聞（このようにして私は「ある時、釈尊から」お聞きした）」で始まります。共に確認し合うという意味でも、きわめて民主的な会議姿勢ですね。

この「Sanghi」の精神は、アンサンブルの姿勢でもあり、「本当のひびきを確認しあう」意味において「音楽の世界」でもあります。

### 3 佛教音楽 その流れ

#### （1）概説

佛教音楽は、当然なことですが經典の伝播経路に重なります。大別すれば南伝・北伝の二系統に分けられます。釋尊入滅一〇〇年頃、戒律の解釈相違からその整備を主題とした第二結集が開催され、上座部佛教と大衆部佛教の二大根本分裂期を迎えました。上座部佛教は南方で展開され、南伝佛教系のバーリ語經典を所依としています。

一方、大衆部佛教の多くは北方に伝播し、カシュミールやネパール、チベット、中

【ころころころころへ】

国などで展開され、サンスクリットを中心とした典籍が多く、チベット語譯經典、漢譯經典、その他の言語譯經典を所依としました。もちろん、僅かながらパーリ語經典も伝わっております。

南伝佛教（Theravāda [上座部佛教]）での継承事例として、パーリ語偈文二点を紹介します。

始めに『三帰依 Ti-saraṇa』です。

Buddhaṃ saraṇaṃ gacchāmi,	佛陀を拠り所として 私は歩みます、
Dhammaṃ saraṇaṃ gacchāmi,	教法を拠り所として 私は歩みます、
Saṅghaṃ saraṇaṃ gacchāmi.	僧伽を拠り所として 私は歩みます。

この偈文で注意願いたいのは「gacchāmi 私は歩みます」の内容で、決して「皆で」という複数形ではなく、また、二人称でもなく、三人称でもありません。一人称単数現在形語尾「-mi」で示されるとおり、「私個人の決意表明」なのです。

次に佛教精神を端的に表現している有名な偈文の一つ『法句經 Dhammapada 5』です。

Na hi verena verāni sammant'idha kudācanam,

まじとこの世では、怨みによって怨みは決して消える（しずまる）ことはない、

averena ca sammanti, esa dhammo sanantaro.

怨みより離れてこそ消える、これが永遠の真実（教法・基本）である。

最後の一行「これが永遠の真実（教法・基本）である」が、佛教の基本姿勢であります。

紀元前三世紀中頃、マウルヤ王朝三代目のアショカ王は、インド統一の名目で実施した東南海岸のカリンガ征服で十万人余の殺戮を行いました。が、「戦争の悲惨さ」を反省中、道ですれ違った托鉢僧の柔和な姿勢とその話を聞いていくうちに佛教に帰依し「ダルマ（法）による勝利こそ最上の勝利」に徹した基本姿勢の依りどころが、この『Dhammapada 5』の精神であったと想われます。



【ころ から ころ へ】

特にこの偈文に関しては、次のような有名なエピソードがあります。

昭和二六（一九五二）年九月、サンフランシスコで太平洋戦争終結の対日講和会議が開催された時、後にスリランカ大統領になられたジャヤワルデネ（Jayewardene）さんが、この偈文を引用して次のような演説をなさいました。

「スリランカは、ブッダの教説を享けて、日本に対する賠償請求権を放棄する」と。この演説に、列席の各国代表者は深い感銘を覚えたそうです。この賠償請求権放棄発言は、スリランカの国民には有名なエピソードで、その時署名に使用された万年筆が大統領執務室に残されているそうですが、恥ずかしいことに肝心の日本ではこの事実は殆ど知られていません。

この偈文の内容は、佛教教理の基本と同様に、何も難解なことではありません。しかし難しくないからこそ実践に困難を伴う内容です。私どもはつい易きに走ってしまいがちで、苦しいことを避けて少しでも易しい方や便利な方に走ってしまいがちですね。そういう安易な傾向が、大切なことを忘れさせてしまうのでしょうか。それだけに、釋尊の教説の底流には、誠実に生きることへの大切な姿勢や精神が満ち溢れているの

で私たちにひびいてくるのでしょうか。

## （2） 声明

さて、佛教音楽は「佛教儀式」の一つとして、チベットとか中央アジア、中国や朝鮮を経由して、日本に伝えられ「声明」となりました。「声明」は、サンスクリット語「Śabda-vidyā」の逐語訳で、次の一覽で示すように、インドの学問体系の基本的分類法「五明 Pañca-vidyā-sūtrāṇa」の一つです。

- |                                 |                      |
|---------------------------------|----------------------|
| 1 声明 Śabda-vidyā                | 言語、文字音韻、文法に関する学問。    |
| 2 因明 Hetu-vidyā                 | 論理学、真理解明に関する学問。      |
| 3 内明 Adhyātma-vidyā             | 自宗の教理、特に佛教の真理に関する学問。 |
| 4 医方明 Cikitsā-vidyā             | 医術（医学・薬学等）に関する学問。    |
| 5 工巧明 Śilpa-karma-sūtrāṇa-vidyā | 工芸、芸能、曆数等に関する学問。     |

「声明」は、言語学や文字音韻学、文法学もその内容として、すべての学問の基本

「ころ から ころ へ」

ですので最初に配置されています。

「声 śabda」を「明らかにする vidyā」のが、「声明」ですから、「声を発する者から聴いてくださる方の心に明らかに伝わるもの」が「声明」の本質です。伝わらなければ声明ではありません。勤行に参加している人々が一緒に声を合わせ合い、心をひびかせ合う。それが願わしい勤行の姿勢ですが、形式で終わるのは残念な事です。

（3） 近現代のあゆみ（動向）

日本における佛教音楽の近代化開始も、明治維新以降で、明治五（一八七二）年の「学制」施行による日本の近代教育開始の影響が多かったです。

この明治時代は佛教音楽の草創期と言われ、雅楽の『越天樂』に詩をつけた『法の深山』（土岐善静作詩）のように、従来のメロディーを使用した替歌から始まりました。

明治一二年、文部省に設置された音楽取調掛の果たした役割は大きく、洋楽の手法が取り入れられた作曲活動が開始されました。その組織が東京音楽学校、現在の東京芸術大学へと発展しております。

大正時代は佛教音楽の成長期でした。特にキリスト教の日曜学校や幼児教育の方法論を取り入れた佛教関係者が中心となって、佛教唱歌・童謡の制作が盛んになった時代です。この時代には、山田耕作や弘田龍太郎などが活躍され、多くの作品を書いています。

昭和になりますと、佛教音楽の時代と言われますが、特筆すべきことは、昭和三年の文部省宗教局内に「佛教音楽協会」が創設されたことでしょう。

理事や評議員に、文学者として、幸田露伴・北原白秋・野口雨情などが、作曲家としては山田耕作・小松耕輔・弘田龍太郎・本居長世・藤井清水・藤井制心などが加わり、昭和四年から昭和一五年まで即ち第二次世界大戦で中断されるまで一回にわたり一七三曲もの公募新作作品が創作発表会で披露されました。

今お見せしている楽譜は、昭和四年の最初の公募懸賞当選作品の楽譜で、『佛教聖歌 第壹回発表 懸賞当選歌並曲』『花祭の歌』『朝の歌』文部省宗教局内 佛教音楽協会刊行（昭和四年四月三日発行）と印刷されていて、今でも演奏されています。

こちらの楽譜には、『第二回発表「佛教聖歌 十一篇」文部省宗教局内 佛教音楽協

「ころ から ころ へ」

会刊行（昭和五年八月五日発行）と印刷されています。山田耕作・小松耕輔・藤井清水などの作曲作品十一篇が発表されています。

昭和二〇（一九四五）年八月一日、過酷な第二次世界大戦終結後、佛教音楽の世界は更なる展開をしますが、時間の関係で大雑把に一部分を抄出してみましよう。

戦後の日本の社会は、初めての敗戦で絶望的な混乱の真っ只中にありました。当時の東本願寺法主大谷光暢・智子夫妻は、その混乱期に佛教音楽の力で人心を癒し、社会の復興に寄与したいとの願いをこめ大谷樂苑を創設されました。翌昭和二十三年六月五日、大阪毎日会館に於ける第一回発表会で、「みほとけ」に始まる公募作品『大谷樂苑選定 讃仰歌 第一回発表（第一番～第十番）』十曲を一挙に発表演奏しています。以降も積極的に創作活動を続け、昭和二十八年六月一日には、『大谷樂苑選定 讃仰歌 第二輯（第十一番～第二十番）』が、そしてその後のバードなども収録して昭和四十八年四月一日には、この『讃仰歌「全三四曲」』が集大成楽譜として出版されています。これ以外に大谷樂苑 結成五周年記念作品『板敷山の夜』（長田恒雄作詞・清瀬保二作曲）（昭和三〇年二月二〇日）や、親鸞聖人七百回御遠忌記念作品 佛教楽劇『念

佛太郎左』（長田恒雄台本・菅野浩和作曲）（昭和三〇年一月二〇日）なども創作發表しています。

また、大谷樂苑創設に近い昭和二二年冬、大谷派内の音楽家、権堂円立・清水脩・岩崎成章 等を中心に長田恒雄・本多鉄磨・伊藤完夫・吉川孝一も加わり、「日本宗教音楽協会」も発足しています。その趣旨は、『伝統の宗教を活かしつつ 近代音楽と四つに組んで、日本の音楽界に新生面を開拓せん』とすること《にありました。その趣旨に基づいて次のような演奏会も開催されています。

昭和二三年四月二四日、東京 日比谷公会堂で、東宝交響楽団・上野音楽学校による演奏会が、続いて五月三日、京都 東本願寺 大師堂内（当日 雨天のため急遽大師堂前から移動）で 朝比奈隆指揮の関西交響楽団・ソロ（砂原美智子、中山悌一、岩崎成章）・朝日合唱団による演奏会が開催されました。翌五月四日午後五時から、大阪 朝日会館でも開催されました。

この三会場での主要プログラムは、山田耕筰作曲『梵音響流』と、蓮如上人四百五十回御遠忌記念の新作、土岐善麿作詩・清水脩作曲『カンタータ 蓮如』で、特にフ

【こころ から こころ へ】

イナレーの念佛の大合唱は、後に独立の作品として演奏されることもありましたが。

終戦直後の物資も交通の便も不十分な時代に、戦後初めての大作発表でもあり、話題を呼んだ作品で、『佛教音楽の進むべき道―大きな反響を与えた演奏会』として「近代音楽に真正面から取り組んだ佛教音楽の荘厳さと迫力が満員の聴衆に多大な感銘を与えた」とも報じられ、高く評価されました。この「カンタータ 蓮如」は、その五〇年後の平成一〇年四月、蓮如上人五百回御遠忌記念コンサートで再演されたのは、記憶に新しいところです。

この「日本宗教音楽協会」は翌昭和二十四年四月二三日には、京都松竹座で朝比奈隆指揮の関西交響楽団及び朝日合唱団による演奏会を開催し、「歌劇「佛陀」より「恋の Aria」を笹田和子のソプラノ・ソロで、また、長田恒雄作詩・清水脩作曲の新作「交声曲「平和」」を発表しています。

ところで、昭和二八年六月 京都の浄土真宗系四大学（谷大男声・龍大男声・京女大女声・光華短大女声）集合体の「京都学生佛教音楽研究会」が発足し、十年余の活動を通して、学生団体ながら積極的な演奏活動もありました。

特に、昭和三十六年四月一日、京都会場で開催された《親鸞聖人七百回大遠忌記念音楽会『交声曲「歎異抄」』（土岐善麿作詞・清水脩作曲）》の演奏は、その最たるものでした。山田夏精指揮・NHK大阪放送交響楽団・バリトン中山悌一・テノール柴田睦陸・メゾソプラノ戸田敏子、そして合唱は、学佛音の現役主体に谷大男声のO・B四名、相愛女子大など関係合唱団若干名の総計二百五十名余による初演演奏でした。なお、この演奏会が東西両本願寺主催になる唯一の合同企画であったことも特筆されるべきことです。

この御遠忌法要を縁として東西両本願寺は、夫々の音楽関係の具体的組織の再認識活動にはいり、大谷派本願寺は、大谷派合唱連盟を明確化させ、本願寺派本願寺は、佛教音楽研究所の再発足準備をスタートさせたのでした。

しかし、各宗門組織再確認の重要な要因であったと思われる「京都市学生佛教音楽研究会」は、昭和四七ころ、時代の激浪やスタッフたちの真剣な協議の結果、発展的解散の道を選択したようです。

ところで近年、各種団体の演奏会プログラムに、共通ともいえるある種の傾向を感



『こころ から こころ へ』

じることが少なくありません。多くのプログラムで頻繁に演奏される作品群に、キリスト教関係の作品が非常に多いことです。演奏者の日常的信仰生活がウェイトの多いキリスト教文化圏の合唱団かと間違うほどの現象です。

宗教音楽といわれるジャンルの歴史的事実関係の影響ではありますが、佛教音楽関係の作品もレパートリーの一群になり、演奏されることを願っております。

Ⅲ 〈佛教音楽 その ひびき〉

——こころからこころへ（生命いのちの流れ）——

佛教音楽を少しでもご紹介させていただきたいという願いを抱いて、この場に立つております。

一昨年までは、カセット・テープによる演奏を聴いていただいていたのですが、昨年と同様に今年も、ライブ演奏を聞いていただくことにしました。これから演奏してくださいの方々は、昨年の一月から月一度、佛教讃歌を歌いたい、そして次の世代にバ

トンタッチしていきたいと願っているグループで、東本願寺の近くで練習している混声合唱団「アンサンブル・サンギーティ」有志の皆さんです。女声部には、皆さんの先輩の方々もいらっしゃいます。男声パートの参加者は、仕事の関係で数人の方のみですが、数年前まで本学の事務局長をお勤めの先生もおられます。

早速「佛教音楽 そのひびき こころからこころへ」を願いつつ、大谷樂苑選定の讃仰歌を中心に佛教讃歌の演奏に入ります。お手元のプログラム順で演奏します。が、三曲目「いのち」は、お手元の楽譜で一緒に歌っていただきたいと思います。

一 「いのちのわが家」（讃仰歌二一番） 長田恒雄作詞 古賀政男作曲

- 1 あかるき陽<sup>ひ</sup>かげ 流れくる み寺<sup>てら</sup>の庭<sup>にわ</sup>に た、ずめば  
光<sup>ひか</sup>る若葉<sup>わかば</sup>も 眼<sup>め</sup>にしみて み親<sup>おや</sup>の光<sup>ひかり</sup> 胸<sup>むね</sup>にあふる、  
み寺<sup>てら</sup>ぞ あ、 こころのわが家
- 2 寂<sup>しず</sup>けき香<sup>かぐり</sup> たゞよえる 御堂<sup>みどう</sup>にひとり 額<sup>ぬか</sup>づけば  
ゆれる灯明<sup>あかり</sup>も かげふかく み親<sup>おや</sup>の誓願<sup>ちかひ</sup> 胸<sup>むね</sup>にしたゝる

「ころ から ころ へ」

3 み寺ぞ あ、ころのわが家  
爽けき風の わたりくる み法の席に つらなれば  
称う御名も 溶けあいて み親の大悲 胸に沁みいる  
み寺ぞ あ、ころのわが家

古賀政男さんは、歌謡界とくに演歌界では、多くの歌手を育てられた作曲家で、美空ひばりさんなどが大切になさった方です。いかにも古賀節という感じの作品ですね。

二曲目は「ほとけさまは」ですが、一昔まえまでは一般的であつた典型的な日本の家庭構成をテーマに描いた作品です。

二 「ほとけさまは」 （讃仰歌七番） 森山美苗作詞 弘田龍太郎作曲

1 ほとけさまは どこにいらっしやる

春は 花咲く 枝のもと ララ 夏は 水辺の 草のかけ ララ  
秋は 空ゆく 雲の上 ララ 冬は 窓うつ 雪の中 ララララ  
いつもどこかで 見ていてくださる いつも何かを 教えてくださる  
ほとけさまは あれあれ あそこに いらっしやる

2

ほとけさまは どこにいらっしやる  
お眉 ま白な おじいさま ララ お目々やさしい おばあさま ララ  
お胸 豊かな お父さま ララ お手々清らかな お母さま ララララ  
昼でも夜でも 守ってくださいる いつもあなたを 支えてくださる  
ほとけさまは あなたの おそばに いらっしやる

三番目の曲、「いのち」はお手元の楽譜で、皆さんもご一緒に歌ってください。

三 「いのち」（会場のみなさんと） 萩田義雄作詞 下総皖一作曲

1 野の花の ちいさな いのちにも ほとけはやどる

【ころ から ころ へ】

次の作品「みほとけは」は、光華女子学園の『聖典』の中にメロディーが掲載されている作品ですが、原曲通り混声四部合唱で演奏いたしましょう。

四 「みほとけは」（讃仰歌一番） 仲野良一作詞 信時 潔作曲

- 3 白露しらつゆの はかない いのちにも ほとけはやどる  
月魄つきしろと ともにきて ひと夜さの 安らぎをおしえる おなじように
- 2 野の鳥の おさない いのちにも ほとけはやどる  
涼風すずかけと ともにきて 生きる身の 喜びをささやく おなじように
- 朝影あさかげと ともにきて つつましい 営いとなみをあたえる おなじように

- 1 みほとけは まなことじて み名よべば  
さやかにいます わがまえに さやかにいます わがまえに
- 2 みほとけは ひとりなげきて み名よべば  
笑えみてぞいます わが胸に 笑みてぞいます わが胸に

3 みほとけは

慕こいまつりて

み名よべば

包つつみています

わがいのち

包つつみています

わがいのち

この作曲家 信時 潔は、皆さんの学園歌の作曲者で、山田耕筰と同じ頃ドイツ留学を経験した方です。「海ゆかば」という荘重なレクイエム（鎮魂歌）も書かれています。が、第二次世界大戦のとき、この曲のすばらしさに魅せられ、護国のため戦争へ行つた若者が少なくなかったそうです。戦後それを知られた信時先生は、クリスチャンですが、「若い人を戦場に送った責任」を感じられ、若干の校歌を除いて作曲の筆を折られました。

大谷楽苑創設の主旨は前に紹介しましたが、数多い讃仰歌の第一番目が、この「みほとけは」でした。筆を折っておられたクリスチャンの信時先生が、この佛教讃歌を書かれたのです。私はこの作品に、「海ゆかば」に共通の深い願いを感じます。皆さんの学園歌はそういう方がお書きになったことを覚えておいてください。

【こころ から こころ へ】

最後に、皆さんの学園の名誉創設者であられた大谷智子前裏方の作詞「歓喜のカンタータ一番 みほとけさまに手をあわせ」に、信時 潔先生のお弟子さんで声楽家の木下 保さんが作曲された作品を演奏いたしましょう。

五 「みほとけさまに手をあわせ」（歓喜のカンタータ一番）大谷智子作詞 木下保作曲

みほとけさまに手をあわせ 南無阿彌陀佛を 称えたら

気持ち（きもち）がさっぱり しましたよ

朝（あさ）の光（ひかり）が ほのぼのと 闇（やみ）を明るく したように

一人（ひとり）のときは 一人（ひとり）なの 二人（ふたり）のときは 三人（さんにん）よ

その一人（いちにん）は ほとけさま 影（かげ）が離（はな）れず来るように 守（まも）って下（くだ）さる ほとけさま

みほとけさまと 一（いっしょ）緒（しょ）なら 世（よ）のくるしみも なんのその

こころゆたかに 勇（いさ）みたつ

わたしとあなたと たすけあい 励（はげ）ましあつて ゆきましよう

皆さんの真摯な若いエネルギーに引き出され、自分たちが味わえた喜びを皆さんにお伝えしたいという願いを込めて、一生懸命演奏させていただきました。皆さんも今後ぜひ佛教讃歌を経験してみてください。

#### Ⅳ 〈むすび 佛教音楽 その目的〉

—ここに ひびき伝わるもの（いのち 眞実の生命との出遇い）—

佛教音楽の目的は、「本当のひびき」との出遇い、言い換えれば「いのち 眞実の生命」との出遇い、それ以外のなものでもありません。

##### 1 教言引用 「眞実」についての教言（言葉）

1 『Von Herzen - möge es wieder - zu Herzen gehen.

（心から —そして再び— 心へと伝わらんことを）』



【こころ から こころ へ】

(Bethoven [1770～1827])

2 『お浄土は 音楽の世界ですよ』 (金子 大榮 [1881～1976])

3 『抱かれて ありとは知らず愚かにも われ反抗す 大いなる御手に』

(九條 武子 [1887～1928])

4 『本当のものがわからないと 本当でないものを本当にする』

(安田 理深 [1900～1982])

5 『自分の眼を明るくするのが勉強だが、眼をふさがれたり 曇らされたりする  
勉強をしてゐて、勉強をしてゐると思つてゐる事はないだらうか』

(中川 一政 [1893～1991])

6 『自分の番 — いのちのバトン —』 (相田みつを [1924～1991])

父と母で二人 父と母の両親で四人 そのまた両親で八人

こうして数えてゆくと 十代前で 一〇二四人

二十代前では・・・？ なんと百万人を超すんです

過去無量の いのちのバトンを受けついで 自分の番をいきている

それが あなたのいのちです　それがわたしのいのちです

7 『美<sup>は</sup>しき色あれど香のなき花のごと　いのちなき言の葉いとさみしかり』

（某 師）

レジュメに、真実を求めた数人の方の基本姿勢を抽出しましたが、最初のペーサーヴェンの言葉が、音楽家の立場から音楽の重要な本質を表現していると思います。

「心から、そして再び、心へと伝わらんことを」

晩年、難聴の進度に应じて、人生の終極をも感じたことでしょう、自殺も考えました。しかしそれを支えてくれたのは彼の信仰心だったのでしょうか。神の声が自分にひびいてきて最晩年、「ミサ・ソレムニス（荘厳ミサ曲）」というすばらしい作品を書きました。この引用文は、その最初「キリエ」の冒頭に書きなぐってある彼の心境で、彼の願いでもありましょう。

神の心から自分の心に届いた「ひびきの世界」を楽譜に書き表した、願わくは、演奏者もその「ひびきのころ」を感知し、そして「聴いてくださる方々に伝えてほしい」という願いをこめた「ころからのメッセージ」であろうと思います。

【こころ から こころ へ】

2 ひとつの 願い ―「本当の自分」との出会い―

相田みつをさんの詩「自分の番——いのちのバトン」に「祖先の人数」が示されて  
いました。十代前で一〇二四人、二十代前では百万人以上 実際には「百四万八千  
五百七十六人」で、二十四代前では「一千六百七十七万七千二百十六人」になります。

この過去無量の親たちが「ご苦労された生命<sup>いのち</sup>」のお蔭で、現在の「私たち一人ひと  
りの生命が存在」していたのですね。気づいてみれば「慈しみ育まれていた大切な自  
分の生命」という「生命の流れ（バトン）」を受け継いでいるのですね。

あなた方も二十年余りの人生の中で、そしてまた、今後も未知の苦しみや、辛いこ  
とにも出遭うことでしょう。しかし、一時の感情でその尊い自分の生命を粗末にする  
ことがあれば、将来生まれてくるであろう大切な生命を粗末にすることになります。  
自分の生命は自分だけのものではない。これだけの親たちの生命が集まって自分の生  
命が存在している。当然のことですが、その生命の流れを次の世代に伝えなければな  
らない責任と義務が私たち一人ひとりにあったのですね。その基本姿勢が、「本当の

自分と出遇うこと」でありましょう。

別な表現をすれば、私たちは、まだ気づいていない「本当のわたし」に出遇うためにも、また、「まだ知らない相手の心や文化」に出遇うためにも、「生きて行く」のではないのでしょうか。

地球上の全人口六〇億人中、あなたは「掛け替えの無いたった一人の大切な存在」、そして私も「その貴重な一人」です。その「あなたとの出遇い」は、六〇億分の一という「奇跡的な確率」でした。この「奇跡的な貴重な出遇い」を受け継いでいるのが「生命いのちのバトンランナー」である私たちでした。

地球環境も含め、その大切なバトンを 次の世代にしっかりと渡す責任と義務が 私たちにはあるのですね。

見えぬけれども あるんだよ、

見えぬものでも あるんだよ。

（「星とタンポポ」より）

「こころ から こころ へ」

鈴と、小鳥と、それから私、

みんなちがつて、みんないい。

（「私と小鳥と鈴と」より）

金子みすずさんの詩から結びの部分を引用させていただきました。

相手との「違いを認めることが出来ず、認めることを許さない」ことがどれだけ哀しい、そして悲惨な現実を生み出して来たことでしょうか。どんなに愚かな戦争を繰り返していることでしょうか。「六〇億分の一の奇蹟的出遇い」をどの位失えば人類は戦争の悪業を解消できるのでしょうか。

「みんな違って、みんないい」という感性のあるところに、他人を認めると同時に、自分の生命をも受けとめてゆける真実への道が啓かれてくるのでしょうか。

「あなた」が「本当のあなた」に出遇い、「わたし」が「本当のわたし」に出遇える相互関係への実践道が、佛教音楽の基本であり、真実のひびきあえるアンサンブルの世界となり、「Buddha 目覚め（自覚）の宗教」への道程にもなるのでしょうか。

長時間ご静聴いただき、どうもありがとうございました。

—二〇〇四年六月二日—